

台湾知識人による新しい中国近代思潮史

水羽 信男

著者の陳儀深氏は、一九五四年生まれで台湾・雲林の出身。現在、中央研究院近代史研究所副研究員。本書は多年に互り政治思想を研究してきた陳氏が、近代中国（一八四〇―一九四九年）の思想史に新しい視座からアプローチした二〇〇ページあまりの手際の良い概説書である。書名に含まれる「思潮」とは「時代の要求」に応え、社会に影響を与え得た政

治思想の主要な潮流を指しており、多くの知識人の知的営為を総合的に捉える視点である。著者は個人の思想分析に力点をおく、従来の研究に対する批判を前提にして思潮史を構想した。また通説では洋務→変法→革命といったような思想史の単線的な発展イメージの影響が強かった。それに対して本書は、ナショナリズム・リベラリズム・社会主義を思想界に

陳儀深著

近代中国政治思潮

——從鴉片戰爭到中共建國

一九九七年

稻郷出版社「二二五〇円」

おける三つの基軸と位置づけ、この三つの思潮が相互に影響を与えつつ併存したとイメージしている。

さらに著者は、今までの通説とは随分と異なる問題提起をおこなった。曰く、

「中華民族主義」とは、漢族至上主義的で侵略的なものではないのか？

国内のエリートが一般の民衆に、中国人としてのアイデンティティを植えたのではないか？

中国の自由主義者は、個の尊厳など、リベラルな諸価値の実現を自己の目的として貫き得たのか？

人類の平等を追求する社会主義は、中国共産党の独占物なのか？……

以下、本書の内容を概観していく。本書の構成は次の通り。

緒論、民族主義(清朝末年の民族主義・文化扶植と民族主義危機・民族主義的発展と障礙)、自由主義(新文化運動と自由主義・国民党統治下の自由主義)、社会主義(清末民初的社会主義思潮、馬克思主義的輸入と発展)、結論。

「東方ナショナリズム」は侵略に抗する反対感情を基調とした外国性の強いものであった。中国においても、守るべき「国」が最初に意識され、その後、「民族」が発見された。この対応型のイデオロギーである「中華民族主義」の形成には、漢族の優越性を前提に種族主義的な言論を展開した知識人が大きな役割を果たした。

このイデオロギーが広く一般の人びとに受け入れられるか否かは、全国市場の形成、マスコミユニケーションや学校教育の普及などの社会経済的な諸条件の成熟に拠っていた。

抗日戦争勝利の意義は、中国のナショナリズム形成の最大の阻碍者日本に勝利したことや、不平等条約の撤廃、欧米諸国に対する対外的な自立を成し遂げたことだけではなかった。むしろ抗戦の意義は、この戦いを通じて党派・宗教・地域・種族を分たず、共通の「国民」意識を共有する「中華民族」が、一定程度、形成されたことにある。なぜならナショナリズムの課題とは、対外的な独立・自立だけでなく、対内的な「国民」統合を進めることでもあったからである。

しかし「中華民族」とは、現在の中華人民共和国の版図に住む全民族なのか。少なくともチベット・トルキスタン・モンゴルの各民族は、主観的にも客観的にも分離・独立する条件を有している。国共両党とともに諸民族を統一するという水平的な「国民」統合の局面において、

原理的に矛盾を抱えていた。また国共両党は分化しつつある社会を垂直的に統合する、という意味における「国民」形成にも失敗した。垂直的な社会統合には、広汎な人びとの政治参加を保障する民主的な機構が不可欠だったからである。

したがって一九二八年以後の国民政府による国家建設だけでなく、一九四九年革命も究極的には国民国家の形成には挫折したというべきであろう。

清末に西欧から導入されたリベリズムが、思潮となったのは一九一〇年代の新文化運動期からだ。中国の自由主義者の本来的な課題とは、リベリズムの伝統のない中国において、社会改造を担い、個人主義を根づかせることであり、批判精神を定着させることであった。

だがその課題の実現は困難を極めた。中国の自由主義者にとつての最大の難問は、帝国主義諸国、殊に日本の侵略に對抗するために、ナショナリズムとリベリズムのいずれを優先するのか、という価値選択を迫られたことだった。こうして一部の自由主義者は、救国のために独

裁を是認し、一九三〇年代から国民政府に参画していく。また抗戦勝利後の内戦期には、救国という課題の実現を求めて、共産党を支持するにいたる自由主義者も少なくなかった。他方、あくまでも国共両党に対してリベラルな諸価値の実現を目指す運動は、一党独裁を企図する両党に挾撃され、その理念を実現できなかった。

しかしリベラリズムとは、本来、人が社会と他者に対してもつ気質や態度のことである。多くの人が、「個の尊厳」などのリベラルな価値観を堅持するならば、個人が社会のなかで享受する自由を十分に保障することができる。リベラリズムの是非を一時的な成功や失敗によって論じる必要はない。

なお本書は民主主義を思潮に含めないが、それは著者にとって民主主義とはリベラルな諸価値を実現するための方策であり、両者は不可分のものだからである。また人びとの政治参加を保障せず、「人民のために」ということだけを追求する「民主主義」を著者は認めない。リベラリス

ムを語ることは、著者自身の民主主義思想の根幹を示すことである。

人間の平等を追求する社会主義は「人類古老の理想」であり、マルクス・レーニン・毛沢東という単線的な系譜だけで理解することはできない。康有為の大同思想から孫文の民生思想やアナキズムなどを含めた多様な思想的実践を含めて、社会主義を考える必要がある。しかしながら中国における社会主義の本格的受容期は、レーニンらによる第二インターナショナル批判の時期と重なっていた。それゆえ当時の中国知識人の社会主義像は、コミンテルンのものに固定されがちで、多様な社会主義思想をトータルに理解することは困難であった。

他方、現代中国の正統思想となった毛沢東思想は主体的能動性を強調し、この点にマルクス本来の思想とは異質なものを含んでいた。だが毛沢東思想は「マルクス主義の中国化」として共産党によって宣伝され、西欧と日本の侵略に苦しむ中国人の民族主義的な自尊心を満足させ、多くの人びとに受け入れられた。

如上の紹介からも窺えるように、本書の方法上の特徴の一つは、ある思潮が社会に受け入れられ、影響力をもち得た社会経済的要因や民族的情緒などについて考察したことである。また著者は知識人の思想的営為における、「建前」と行動の「本音」との関係についてもリアルな眼差しを向けている。一例をあげれば、清末における劉師培のアナキズムの提起について、著者は立憲派との論争の終焉による反清運動の沈静化を危惧した章炳麟が、新たな論争的局面を創出するためにやらせたものだと指摘した。本書はあれこれの思想的な言説を、単に文字面だけで理解せずに、当時の政治状況のなかで読み解くべきだと主張している。

思潮という分析の枠組や大胆な通説批判とともに、著者の方法的視座から学ぶべきものは多い。

ところで著者は三つの思潮の相互関係を次のように説明している。社会主義の理想を追求するならば、「一つの中国」を目指す「中華民族主義」を声高に訴えることによって、国内の民族間・階層間の

諸矛盾を覆い隠すべきではない。取り組むべきは少数民族の分離独立をも含んだリベラルな価値観の実現である。そうしない限り改革開放政策の進展にとまなう「市民社会」の形成は、中華人民共和国における体制的な社会主義の倒潰を結果することになろう。

この中国の近未来にかかわる展望は、台湾独立派の知識人と目される著者の政治的立場と無関係ではあるまい。本書は今日の台湾思想界における「自我の確立」に役立つことが期待されている（裏表紙のコピー）。また「独立派知識人が近代中

国の研究を生業とすることに矛盾を感じないか？」との問いに、著者は思想の多元化を実現した来たるべき海洋国家台湾にとつて、華語世界の思想的伝統を無視することはできないと回答している。

こうした本書の議論の背景にナショナリズムの相対化とリベリズムの復権による、「社会主義」の再生という課題があると感じたのは、評者だけであろうか。国民大会代表でもある著者の政治的立場については、さまざまな批判がありうる。また本書の学問的な作業仮説に、政治主義的な歪みが生じていないかどうか

を検討することも重要な課題であろう。しかしながら本書は、今日の台湾知識人の動静を理解するうえで興味深い素材であることは間違いない。

(1) 著書に『独立評論』的民主思想』（聯経出版事業公司、一九八九年）など。

(2) 本書とは問題関心を異にしているが、大陸でもこの三つを「中国近代三大思潮」と位置づけた研究が始まっている。『十字街頭与塔』（胡偉希ほか、上海人民出版社、一九九一年）など。

（広島大学）